

## 写真①



島根県飯石郡三刀屋町（当時飯石村）にある永井隆博士の実家。2男3女の長男。博士が生まれた翌年、父はここで医院を開業した。如己堂の赤瓦は、戦後ここのはなれの小屋から馬車と列車で長崎に運ばれた。

## 写真②



旧制松江中学校には母の実家に下宿して通った。中学時代のニックネームは“隆盛”。優秀な成績で卒業後、高校では自然観察と議論を好み唯物論のとりことなった。卒業の頃は身長1.71m、体重70kgと大柄だった。

## 写真⑤



江戸時代、キリシタンの信徒頭をつとめた帳方の家系で、家畜仲買を営む森山家に下宿した博士は、広島歩兵第11連隊に入隊後、森山家のひとり娘である緑からキリスト教の書物を受け取る。改宗を決意した博士は、帰国後洗礼を受け、緑と結婚した。

## 写真⑥



日中戦争に軍医中尉として従軍すること2年6ヵ月、中国の北から南まで第一線ばかり72回の戦闘を経験した博士は、敵味方の区別なく、負傷兵や現地住民の救護活動を行った。

※診断を考へてゐるしばらくはこの男の国籍は思はず

## 写真⑨

← ヘレン・ケラー



ヘレン・ケラー女史が全くなんの前触れもなく如己堂を訪れた。（中略）ケラーさんの手が空気の中をしきりに私の手を探し求めながら近づいてきた。とうとう届いた。手を握り合った！温かい愛情が電流回路を閉じたときのように、瞬間に私の五体へ流れこんだ。

（「いとし子よ」より）

## 写真⑩

↑ 昭和天皇



陛下は、恐れ多くもみ足をお運びになり、親しげに「どうです。ご病気は？どうか早く回復するよう祈ります。」とのお言葉をたまわり、また、私を治療してくださる影浦教授に、「治療を頼みます。」とまでお言葉をお添えになった。なんとというありがたいお言葉だろう。

（「いとし子よ」より）

### 写真③



運動神経は鈍かったが、バスケットボールは創意工夫を生かし、メモ書きを怠らない熱心さで全国大会3位になった。また、短歌に興味をもち、アララギ支社に入って歌会にも出席していた。母を亡くした時は、母の靈魂は永遠に滅びないと直感した。

### 写真④



(長崎医大4年・後方左端)

卒業式で答辞を読むはずだったが、クラス会の帰りに雨に濡れ急性中耳炎となって入院。カトリック信者の老婆が付き添い、一命を取り止めたものの、聴力を失って聴診器を使えない恐れから専攻を内科から放射線科に変えざるを得なかった。

### 写真⑦



(前列右から4番目)

結核予防の集団検診が増加し、しかもフィルム不足のため直接透視で検査していたことから放射線を過量に受けて慢性骨髄性白血病、余命3年と宣告された。それでも第11医療隊隊長を務めたり、また、自発的に貧しい病人の無料診療を行ったりした。

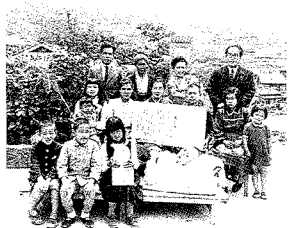
### 写真⑧



(半年間喪に服す・昭和21年1月頃)

原爆が投下された時、爆心地近くの長崎医大レントゲン科部長室にいた博士は、猛烈な爆風で吹き飛ばされ、無数のガラス破片を浴びた。何度も倒れては起き上がり、3日間大学病院内外で救護活動を行った。その後は三山で2カ月間巡回診療を行った。

### 写真⑪



表彰状 永井 隆  
常に危険を冒して放射線医学の研究に心血を注ぎ、遂に放射線職業病の一つである慢性骨髄性白血病の犯すところとなったが、なお不屈の精神力を振り起して職務に精励し、学界に貢献したことはまことに他の模範とすべきところである。

内閣総理大臣 吉田 茂

### 写真⑫



左:(息子) 誠一  
右:(娘) 茅乃

「痛い」「苦しい」などの言葉を一言ももらさず書き続けた永井博士は、「乙女峠」を脱稿した直後右肩甲部に内出血が起こり右手が使えなくなって、書くことを止めた。それからまもなく「白血病による心臓衰弱」で生涯を閉じた。死後、解剖執刀医は「死を賭して精進した結果、死期がのびた」と発表した。